

概況 新北見市になる前の歴史

第1節 アイヌ語に由来する北見市の地名

北海道の地名には、アイヌ語を起源とするものが多くあります。

15世紀頃より北海道の地図が作られ始め、土地の人の話し言葉を地名等に取り入れたことで、表記には聞いた人によって微妙な違いがありました。

漢字に書き改めた時の音・訓によって読み替えたり、無理に短く二文字化したりした為にアイヌ語の原型からかなり離れてしまった地名も多く作られました。

北見市にある地名もその例に漏れません。

常呂の地名の由来はアイヌ語のツッコロ(山崎があるの意)による説(蝦夷地名考扞里程記・戊午日誌)や、トコロペツ(沼を持つ川の意)による説(北海道蝦夷語地名解)があります。

古くはトウゴロと書かれた地図もあり、元禄御国絵図(元禄年間:1688～)には「ツッコロ」としての地名が見られます。

松前蝦夷一円之図(1779年:安政8年)・沿岸図(谷口青山 1798年:寛永10年)・今蝦夷地地形図(慥斎改正 1799年:寛政11年)にはトコロとあります。

旧北見市は野付牛村そして町となっています。

野付牛の地名の由来は、ヌブンケシ(野の端にあるところ)から漢字に当てられています。

端野は、大正10年(1921年)野付牛より分村したとき「野の端」を逆に使い端野村としました。

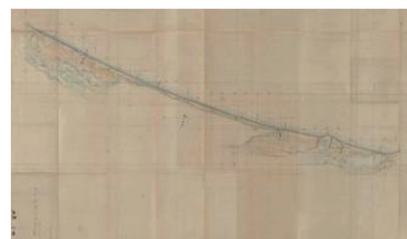
留辺蘂は明治5年(1877年)ムエカエヲツネ村として生まれ、明治8年(1875年)漢字名で生顔常村となり、明治42年(1909年)野付牛と合併、大正4年(1915年)ほぼ現在の自治区域で武華村が誕生しています。

●現在の北海道地図の原型を作った間宮林蔵と伊能忠敬

伊能忠敬(1745年～1818年) 1800年から1816年に全国を測量し大日本沿海輿地全図を作成しましたが、当時の蝦夷全てを測量ができていません。

伊能忠敬の業績を受けたのは間宮林蔵(1780年生～1844年没)です。

蝦夷地御用掛雇となった林蔵は箱館(現在は函館と表記)で、伊能忠敬と会いオホーツク沿岸から樺太を測量し蝦夷図を完成、その後「大日本沿海輿地全図」ができました。



▲常呂町沿岸がかかれた
大日本沿海輿地全図
国土地理院HPから引用